

「宗教と暴力」

最新事例紹介

同志社大で研究者

「宗教と暴力」をテーマにした公開講演会が20日、上京区の同志社大学であり、市民ら約60人が参加した。学内の一神教学際研究センター長・小原克博さんが、イスラム教徒が全身を覆うブルカを公共の場で着用するのを禁じるフランスでの議論や、同性愛の公表をめぐる米国での論争など最新の事例を紹介。思想・信条といった「心の領域」を公にしようとし、暴力を生む危険性に警鐘を鳴らした。

小原さんは、近代には宗教などの私的領域を公の場を持ち込まない「政教分離」の考え方が、宗教の違いによる対立や暴力の連鎖を抑えてきたと指摘。現代社会では、暴力を受けた側の「痛み」への理解が乏しく排除する傾向にあると述べた。そのうえで、それを記憶する知恵の一つとして、日本の動物供養に注目。ア

イヌ民族の儀式「イオマンテ」（熊の霊送り）や、商品開発に使われた微生物を弔う曼殊院（左京区）の「菌塚」などの例を挙げた。

（小林正典）